

山本覚馬先生 新島八重夫人生誕の地

記念碑除幕式 式辞

松 山 義 則

本日、学校法人同志社は、鶴ヶ城の西会津若松市米代二丁目、宮崎十三八氏宅内に、心からなる感謝をこめて、会津藩士、山本覚馬氏、その令妹、新島八重夫人の生誕の地を記念して、この碑を建立いたします。

幕末、わが国の歴史的状況は、権力機構の激変するさなかにおかれ正義と善行、信念に生きる不屈の人々をも、悲痛にして数奇の運命におしやるものでありました。洋式砲術を学び、蘭学、英学に広く通じる山本覚馬は、兵を率いて京都禁門の変に、長州を打ちましたが、不幸にして病を得、失明の人となりました。その後、維新初頭、薩摩藩邸に幽閉の日を送りましたが、彼の幅広い学識と、鋭く高い識見は、新しい日本を開くに、なくてはならぬ光でありました。

ことにわが国に一つのキリスト教主義大学創設を念願する新島襄に出会い一八七五（明治八）年彼とともに、その結社人となり、官許同志社英学校の設定をなしとげたのであります。加えて、京都の地に、各種産業を興し民生を整え、文明開化の活力あふれる指導者としての彼の名は、不滅のものとなりました。

また、令妹山本八重は、その若き日、鶴ヶ城に籠城、銃をとり大砲隊を指揮する勇氣あり、品位ある女性でありました。後年、新島襄夫人として、親しく彼を助け、また同志社の女子教育をなう人となりました。

会津に生を享けたこの二人の人物によつて、京都の地にまかれた一粒の麥は一一三年をこえる間に大きく成長し、現在、私学同志社は大学、女子大学をはじめとして十二の学校を経営し、三万人の学生、生徒、二十五万人をこえる卒業生を全世界各地に送り出しました。

この度、山本覚馬、新島八重生誕の地記念碑除幕式を挙行するに当たり、まず会津史学会会長宮崎十三八先生が精緻なる歴史的検証をもつてこの地を確定され、加えて記念碑実現のために格段のご尽力をたまわりましたことに對し心からなる謝意を表します。また、木村淳子様、さらに歴史家五十風勇作先生のご援助ご協力、山本家菩提寺住職増子大道老師の永年にわたるご温情、ことにこの計画を当初から熱意をもつて促進いただきました、前会津若松教会牧師筑波学園教会主任教師、若月健悟先生に對しまして深甚の謝意を表します。また、早川広中会津若松市長をはじめ市ご当局ならびに市民の方々のご芳情に對し心から御礼を申し上げます。

この新しい記念碑を通して、多くの人びとがさらに会津を学び、その心に感じ、加えて会津の人によつて創設された同志社との友情が深められますようにお願いいたします。

いま天にある山本覚馬先生、新島八重先生のみ霊の上にとこしえの平安がゆたかにありますように心から祈ります。

(一九八九年五月三十日 学校法人同志社総長)

祝辞

早川 廣中

本日、山本覺馬先生、八重先生の生誕の地、会津若松市米代において、両先生並びに新島襄先生の創設された「同志社」の関係者皆様の手により生誕の地記念碑が立派に建立されましたことは、誠に同慶に堪えず、心からお祝いを申し上げます。

思えば慶応四年一月ここ会津の地を遠く離れた「鳥羽・伏見」において響いた一発の銃声は、日本各地を動乱の渦に巻き込み、幾多の命を山河に散らしたのであります。

この悲惨なる戦火において、山本先生ご兄妹は、砲術指南の家風を全うされ、奮戦これ努められました。が、衆寡敵せず、明治の世のご一新を迎えるに至ったのであります。

ここ会津の地のみならず近代日本の隅々に多くの傷跡を残したこの戊辰の役の後、山本先生ご兄妹は、新しい日本を築き上げるために、自らの心に刻みこまれたこの傷跡を魂の糧とされ、新島襄先生との出会いのもとに、同志社英学校を開校されたのは、皆様ご案内のとおりであります。

どうか、このたびの記念碑建立が契機となり、同志社建学の精神と平和で豊かな社会を願う心が大きな拡がりとなって、世の人々の魂に刻みこまれますことを念願して止みません。

終りに、本日の記念碑建立へ向けた関係者皆様の並々ならぬご尽力に対し、深く敬意と感謝の念を表しますとともに、学校法人同志社の限り無いご発展とご参会皆様の益々のご健勝を祈念いたします。お祝いの言葉といたします。

(一九八九年五月三十日会津若松市長)

祝 辞

高 瀬 喜 左 衛 門

ご紹介いただきました会津短大の高瀬でございます。

本日ここに新島八重夫人、夫人のお兄様の山本覚馬とお二人の記念碑が同志社の皆様のご好意、関係各位のご努力によりまして立派に除幕されまして、心からお祝い申し上げますとともに、これらの方々に感謝いたしたいと思えます。

記念碑のお二人のうちで、正直に申しまして新島八重夫人については会津でかなり良く知られております。同志社の新島襄先生のご夫人であつたということ、戊辰の籠城中、男に劣らぬ働きをされたことなどで知られております。

ところが、お兄様の山本覚馬につきましては、砲術の大家であつたことなどが一般の知識であり

まして、それ以外のことは知られていません。実は私も詳しく知っている訳ではありません。

私の知識がどのくらいかと言いますと、「会津若松史」というのが戦前に出ましたが、その下巻に人物略伝がありまして、そこに山本覚馬の京都時代のことの少し書いてあります。そして最後のところに、濱岡某の撰文による、と記してあります。もう一冊読んだことがあるのは「山本覚馬伝」という単行本でして、同志社から出版された青山霞村という先生の著書でございますが、それくらいです。

この本を読みますと、濱岡さんというのは濱岡光哲さんのことで、京都における山本覚馬のお弟子さんといえますか、教え子の一人で、京都新聞を創設された人だったことが分かります。会津若松市史の文は同志社の伝承の孫引きに当たる訳です。

つまり、山本先生の業績の大部分は京都におけるお仕事であり、それを現在我々が知っているのは、同志社のなかで話を伝えて下さったお陰である、と言うことにあひなります。

それからまた、失明されていたにも拘らず、同志社でのお仕事のほかに、京都府議会議長、商工会議所会頭に該当する立場で活躍することを許していただいたと言いますか、余所者の会津人が活躍することを許した町の雰囲気感謝申し上げなければなりません。

申し上げるまでもなく、京都は伝統を重んじる町であります。しかし、同時に進取の気性に富んだ町でもあります。その意味で、新知識としての山本先生に力量を発揮する場面を与えて下さったのであります。

そういたしますと、事柄の正しい認識からすれば、本日の祝辞は、その九十九パーセントを同志社にたいする感謝に充てるのが妥当であることになりました。

本日は誠に有り難うございました。もう一度、心から御礼申しあげますとともに、お二人のお名前と業績が永く伝わることを祈りまして、祝辞とさせていただきます。

(一九八九年五月三十日 福島県立会津短期大学長)

祝 辞

中 川 幸 意

このたび、学校法人同志社大学ご当局によって、同志社創業の一人であり、京都府政の伸展に大きな功績を挙げられました山本覚馬先生とその妹新島八重夫人の生誕の地、ここ宮崎十三八様の敷地内に記念碑が建立されましたことは誠に意義深く、たいへん喜ばしいことであります。

私たちの会津史談会は、郷土史の究明と普及を通じて地方文化の向上に寄与することを目的としておりますが、先人の顕彰に関することも大きな事業の一つであります。

山本覚馬先生・新島八重夫人はまさに顕彰されるべき会津人でありました。

先生は兵学をもって会津藩主松平家に仕えた山本権八の長男として若松城下のこの地に生まれました。

日新館で弓馬刀槍の師伝を得、やがて江戸に出て佐久間象山や勝海舟に洋学・砲術を学び、帰藩後は会津の近代化に大きな功績がありました。

鳥羽・伏見の戦いで捕えられ、薩摩屋敷に幽閉・獄中起草の「管見」と題する経世論は余りにも有名です。

失明と脊髄損傷の苦悩を克服され、京都府顧問・京都府会初代議長・京都商工会議所会頭として京都の教育・文化・医療・産業等に貢献された業績はまさに顕著なものがあります。しかもこれらの根底には良心・平和・人道・福祉の思想が見られます。

またキリスト教こそ、日本人の心を磨き進歩を促進するものと考えられ精神教育の重要さ、良心の教育を願って、新島襄先生の同志社の設立に協力され高邁な識見と行動力によって同志社の基礎を確立されました。

また妹の八重夫人は、かつて戊辰戦争の時は、男装して会津の大砲隊を指揮したという女丈夫ですが、新島襄先生の妻としてよく内助の功を致され、同志社の発展に尽されました。日清・日露戦争の際は篤志看護婦として活躍にもなりました。

いま、同志社大学ご当局の御厚情によって、私たちが尊敬してやまない山本寛馬先生、新島八重夫人が錦を着て誕生の地に帰られた感を深くしております。誠に有難うございました。

ここに心からの感謝と敬意を表して祝辞といたします。

(一九八九年五月三十日 会津史談会会長)

建碑経過報告

橘 愛 治

本日、ここに山本寛馬先生・新島八重夫人生涯の地記念碑除幕式を挙行いたしますに際し、建碑の経過を報告いたします。

一九八六（昭和六十一）年同志社が、京都府綴喜郡田辺新校地の施設充実のため、同志社創立一一周年記念募金運動を始めました時、同志社本部関係者が会津若松を訪問いたしました。

そのとき、当時の日本キリスト教団会津若松教会の若月健悟牧師から、大龍寺の山本家墓地の管理に関連して、何か山本寛馬先生・新島八重夫人を記念するような碑を建ててはどうかという提案がございました。

かねがね同趣旨のことを考えておりました同志社は、そのご提案にもとづき、同志社の歴史資料を扱っている社史資料室の河野仁昭室長を派遣して、若月牧師とご当地の歴史家五十嵐勇作先生らと現地を視察、協議をいたしました。

既に、その時同じく歴史家の宮崎十三八先生のご尊宅（会津若松市米代二丁目一番）が山本家跡であつたことが確認されておりました。

昨年秋、同志社総長松山義則、教学担当理事田中久雄高等学校長、本部庶務部長園部望(当時)らが、会津方面の校友、同窓との懇談会をかね、会津若松市を訪問の際、宮崎先生から「もし、同志社が山本覚馬先生・新島八重夫人誕生の地の碑を建てるなら、土地を提供したい」というお申し出を受け、その後、土地の所有者であります木村淳子様からも快くご承諾を賜り、同志社として協議いたしました結果、建碑することを決定いたしました。

以後、宮崎先生と連絡をとり、ご教示を仰ぎながら、建碑のための作業を進めてまいりました。

石材は宮崎先生のご紹介により石万工業株式会社様で購入し、刻字、建碑工事一切をご依頼し進めてまいりましたが、本日ここに除幕式を行うことが出来るはこびとなりました。

石碑の概要は

台石が安山岩で 巾一二〇cm 高さ五〇cm

石碑は蛇紋岩で 巾九〇cm 高さ六〇cmであります。

碑文の表面は

「山本覚馬・新島八重誕生の地」とし

新島八重の自筆で、鶴ヶ城開城の歌

「明日の夜は、何国の誰かなかむらん

なれし御城に残す月かげ」

と刻字しております。

裏面は、同志社松山義則総長の選文による山本覚馬先生と新島八重夫人の略歴などを刻字しております。終りになりましたが、この建碑にあたりお世話をしていただきました皆様方に厚く御礼を申し上げますとともに、この碑が永遠に会津若松市の一つの記念碑となりますことを、お願いいたします。建碑の経過報告を終らせていただきます。

(一九八九年五月三十日 学校法人同志社本部財務部長)